

英語学科フレッシュマン・キャンプにおける

英語学習の指導

——情意の領域を中心として——

佐々木輝美

1. はじめに

フレッシュマン・キャンプは新入生オリエンテーションの一環として行なわれているが、オリエンテーションという言葉はどのような意味を持つのであろうか。*Encyclopaedia Britannica* (p.582) の説明の一部を引用し、その本来の意味を先ず考えてみることにする。

Orientation, strictly, the fixing or directing of something so as to face the east. The word is used in architecture to express the position of a building in relation to an east-west axis.……

Orientation is frequently planned to take maximum advantage of the daily and seasonal variations of the sun's radiation.……

これを要約すれば、「オリエンテーションとは、もともとは建築に関する用語で建物を東に方向づけることによって、太陽の放射エネルギーの恩恵を最大限に受けるようにすること」、となる。これを大学でのオリエンテーションに当てはめて表現すれば、「大学教育の恩恵を最大限に受けられるよう、大学生を正しい位置に据えること」、となるであろう。そして本学英語学科のオリエンテーション・キャンプに当てはめれば、「英語学科における教育の恩恵を最大限に受けられるよう、学生を正しい位置に据えること」、と言えるかも知れない。

英語学科オリエンテーション・キャンプは、特に英語学習に関わるオリエンテーションが行なわれる点で特徴的であり、またその意義があると考えられる。しかし、キャンプ実施に伴う人的・経済的消費が大きいことも事実である。そこで、これらの消費に見合う効果的なキャンプについて継続的に考

える必要がある。本稿では外国語（英語）学習における動機など、いわゆる情意領域の問題を取り上げ、本年度キャンプのアンケート結果を参考にしながら、英語教育の観点からキャンプをいかにプログラムすべきかを検討する。

以下に、先ずオリエンテーションに関する教育的資料を引用しながら、大学におけるオリエンテーションの意義について考察し、オリエンテーション・プログラムにおけるアカデミックな側面での指導の必要性を指摘する。次に、英語学習における情意領域の研究資料を参考にしながら、特にキャンプにおいては、英語学習における情意の側面でのオリエンテーションが可能である事を指摘し、英語学習における学生の動機をどのように高めるかという視点から、効果的なキャンプのプログラムについて考えたい。

2. 大学における新入生オリエンテーション

「大学生なのだから、大人として扱うべきであり、オリエンテーションなど必要ない」という意見も根強く残っているようである。そこで、大学におけるオリエンテーションの必要性について検討することから始めたい。河合（1982, p.14）は、「突き放す親切も必要である」と述べながら、オリエンテーションなしのオリエンテーションを提言しているが、その真意は、形はどうかであれ、衝撃的且つ効果的なオリエンテーションの必要性を説いていると解釈される。稲越（1990）は、「大学に学ぶ意志を持って入学するのであるから、教員が、学生に対して学習の動機づけを与えることは不用のことと考えられていたが、この前提が誤りであると気づくことが多い（p.28）」と述べ、現代の学生の学習への態度・指向性の変化をあげ、大学におけるオリエンテーションの必要性について述べている。また、遠藤（1987）も「課題意識を持たないと非難するのは酷であり、入学試験の難関を突破した後に、休息をとる者、次の目標の設定にとまどう者がでてくるのは当然の事である（p.8）」と述べ、受験を終えた学生に対し、新たな方向づけをする事の必要性を述べている。

戸惑いという点で、しばしば学生の孤独感という問題があげられる。望ましい人間関係は学習効果を上げると言われているが、この点からも学生の孤独感という問題は重要であり、大学側の指導が必要であろう。Cutrona（1982）は、特に入学直後の学生の孤独感が高いことを示している。また、諸井（1986）は、Cutronaの研究の追試を行い、特に下宿群で孤独感が高い傾向が見られたことを報告している。従って、特に入学時にキャンプを行うことは、新しい環境に置かれて生じる学生の孤独感の問題解決にもなり、大学での学習準

備も容易になると考えられる。この点からも、入学時の、しかも早い時期にオリエンテーションを行なう事が必要であると考えられる。

オリエンテーションの必要性について、さらに油納(1990)は、過去においては大学生を大人として扱い干渉しないという考えでよかったが、現代ではそうすることは「教職員側の無責任、責任放棄以来の何物でもないであろう(p.30)」とさえ述べている。

このようにして、オリエンテーションの必要性を述べている資料がほとんどで、否定的な資料は見当たらない。しかし、最も重要な事は、どのようなオリエンテーションを行なうべきかという問題である。その形態によっては、オリエンテーションを行なっても行なわなくても変りはないということがあり得るからである。オリエンテーションを行なうに当たっては、どのような目標を設定し、その目標達成の為には何が必要かを検討しなければならない。

そこで、オリエンテーションを早くから導入しているアメリカの大学を例に、その方法や効果について述べ、望ましいオリエンテーションの形態について検討したい。

高橋(1990)は、アメリカで過去10年余りにおいて急速に普及してきたオリエンテーションの一環としての「1年生教育(freshman education)」について述べている。これは1学期間にわたるセミナータイプのコースで、調査対象大学272校のうちの40%弱の大学がこのセミナーを実施し、その多くが単位化され、主なコースの内容は、1) 学習方法・学問への適応、2) 社会・人間関係、3) 大学についての理解、4) 就職情報・進路計画であると報告している。ここで、日本のオリエンテーションと異なって特徴的なのは、新入生に対しアカデミックな面での方向づけを中心に行なっている事、及びオリエンテーションをコース化し単位化しているということであろう。日本の状況を考えると、オリエンテーションを単位化する事は様々な理由で困難と考えられるが、アカデミック面でのオリエンテーションは、何等かの形で導入すべきであろう。本校と同様に外国語教育に力を入れている上智大学ではすでに昭和41年から1泊2日のオリエンテーションが行なわれており、本学と同様に、学生の7~8割がオリエンテーション・キャンプを高く評価していることが報告されている。しかし課題として、アカデミックな面でのオリエンテーションの必要性も指摘されている。この点について、越前(1990)は、「もっと学習意欲を喚起させ、学問に対する自発的な関心を呼び起こさせるようなプログラム(p.9)」の必要性を述べている。以上の事から、オリエンテーションの重要な目的の1つとして、「大学における学習方法、学問の適応」があげられる。

さて、オリエンテーションを行なう事によってどのような効果があるのだろうか。中村(1982)は、アメリカにおけるオリエンテーションの効果について、以下のような報告を行なっている。

どの大学でも新入生に対するオリエンテーションを実施するようになってから、1)学生が大学生活に早く適応するようになった、2)学業成績が向上した、3)中途退学者が減少した、4)転科転類を希望する学生が減った、5)処分を受ける学生が減った、6)教職員と学生との間の理解が増進した、7)愛校心が昂揚された、などの成果を報告してオリエンテーションの実施の成果を認めている(p.6)。

アメリカではオリエンテーションが単位化されるなどして、効果的にプログラムされている点については先に指摘した通りであるが、これだけの効果があるとすれば、大変魅力的であると言える。文化差という要因もあり、そのまま日本に当てはまらないであろうが、日本でもオリエンテーションをより効果的にプログラムすれば、これらの効果を期待することが可能であろう。

さらに中村(1985,p.5)は、アメリカの National Association of Education の調査を引用し、新入生オリエンテーションを成功に導く要因として次の8項目を報告している。

- 1) 教官と学生とが直接個人的に接触すること
- 2) 大学の全教員の理解と協力があること
- 3) 学生に対する資料が十分に備っていること
- 4) 学生の適当なグループ分けがなされていること
- 5) 訓練された上級生を参加させること
- 6) 課外活動グループの協力があること
- 7) 新入学生の生活を妨害する勢力がないこと
- 8) 組織的に行われる助言教官制度があること

これらの項目は、現行のオリエンテーションを評価するのに役立つと考えられる。本学の英語学科フレッシュマン・キャンプをこれらの項目に照し合せて評価すれば、特に3)と5)の項目において改善の余地があると考えられる。3番目の項目の、「学生に対する資料」とは、例えば入試の成績、高校時代の記録、将来の希望、健康状態、心理テスト、家庭環境などがあげられるが、これらの資料を充実させる事は労力を要すると考えられる。しかし、例えば入学時に英語に関する診断テストを行ない、個人データを作成する事

は、アカデミックな指導においては必要であろう。また、5番目の項目については、特にアメリカの大学でのオリエンテーションで大きな役割を果たすのは大学院生または4年生から成るカウンセラーであるとされている。三浦(1977)はこの点について、「カウンセラーは人物、指導力、判断力、行動力共に優れた学生の中から選ばれ、ある一定の訓練期間を経て、大学から任命される(p.22)」と述べている。英語学科フレッシュマン・キャンプにおいては、できるだけクラブ等で指導的な立場にある学生を募り、数回のミーティングを持ちながらキャンプの準備を行なっているが、必然的に事務的な仕事が多くなってしまふのが現状である。「訓練された上級生」という点で、改善の余地があると言えよう。

このように、さまざまな要因に配慮しながら、明確な目標のもとに、オリエンテーションのためのキャンプを行なう必要があると考えられる。現在各大学で行なわれているオリエンテーション・キャンプの多くは学生部主導型であり、教員の協力と理解を得ることが難しいということが指摘されている。この場合の問題点として、学生部主導型のオリエンテーション・キャンプは大学生活一般、登録等の事務面等が強調され、アカデミック面についてのオリエンテーションは補足的になることがあげられている。この点において、本学英語学科が行なっている教員主導型のオリエンテーション・キャンプでは、新入生に対しての英語学習の指導を重点的に行なうことが可能である。さらにアカデミックな面での指導は、入学時だけでなく4年間続く事になる。浅尾(1985)はオリエンテーションを、入学時における短期間の狭義のものと、大学生活全期間にわたって首尾一貫して行なう広義のものに分け、後者の重要性を指摘している。

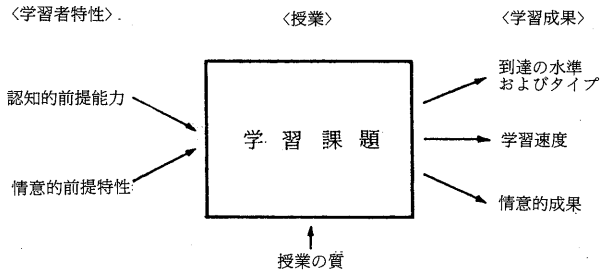
さて、以上の検討から英語学科の新入生に対するオリエンテーション・キャンプの目標として、「4年間の英語教育を見渡しながら、新入生の英語学習面の指導を行なうこと」が考えられる。そして、この目標のためには、先に指摘したように、学生についての資料が揃っていること、訓練された上級生がいること、そしてなによりも教員の理解と協力が必要である。

3. 外国語学習における情意の問題

前節では、本学英語学科のキャンプでは教員主導型のメリットを生かし、アカデミックな面での目標が強調されるべきであることを述べた。ここで問題となるのは、「アカデミック面(英語学習)における方向づけ」をキャンプでの目標として設定した場合、どのようにプログラムするかということであ

る。本節では、学習における変数について説明した後、オリエンテーション・キャンプという特別な状況においては、特に情意に関わる変数を扱う事が可能である事を述べていく。

さて、先ず学習にはどのような変数があるのだろうか。図に示すように、ブルーム (1976) は、学校学習理論の主要変数として認知的前提能力、情意的前提特性、そして授業の質の3つのをあげている。



学校学習理論の主要変数
(ブルーム, 1976, p.14)

認知的前提能力とは、学習課題の前提となる基礎知識を、情意的前提特性とは、学習課題を習得しようとする学習者の動機づけを、そして授業の質とは、学習における手がかり、練習、そして強化などが学習者にふさわしいかどうかを、それぞれ意味する。いくら質の良い授業を行なっても学習者が動機づけられていなければ学習効果は上がらないとよく言われるように、学習においては、いかに動機づけられているかが主な要因の1つとなる。そこで、教授者側が行なうべきこととして、学習者の認知的前提能力を把握し、それにあった質の良い授業を設計することと同時に、学習動機についても配慮することがあげられる。

さらに動機について重要なことは、自らの意志で働きかけるという、自己達成的な側面が必要とされていることである。動機には、外発的動機と内発的動機とがあり、「容易な課題での成功(テニスで弱い相手に勝つとか、簡単な科目でAをとる)は、再度その課題に取り組もうとする可能性を高めない(ワイナー, 1980, p.194)」ということが言われている。勿論ある科目でAを取る取らないということも重要であるが、単位が与えられるなどの、いわゆ

外的報酬は、報酬がなくても本人の意志によって活動すること、つまり内発的動機を低下させると一般に言われている。この点を考慮すれば、オリエンテーションとしてのキャンプにおいては、特に目先の報酬がなくても英語を学ぶというような、内発的な動機を学生に持たせるよう方向づける試みが必要である。

さて、この節の中心である、外国語学習における動機の問題について考えてみる。外国語学習においても情意的前提特性は、いわゆる情意領域における動機の問題として研究が行なわれてきた。外国語学習における動機は一般的に、統合的 (integrative) 動機と道具的 (instrumental) 動機の2つに分けられる (Gardner and Lambert, 1972)。統合的動機とは、ある外国文化に対して好意的な態度を持ち、その文化圏の一員になりたい、または当該の外国語を母国語とする人々と仲よくなりたいためにその言語を学ぶことである。一方、道具的動機とは、手段的に英語を学習することで、例えば単位を取る、進学する、卒業する、より良い職業につく等が考えられる。

これらの動機の役割については外国でも多くの研究が行なわれており、日本では吉田 (1969) が規模の大きい調査を行なっている。吉田は、英語学習においては、道具的動機を持つ学生よりも、統合的動機を持つ学生の方が良い結果をおさめるであろうという仮説を立て、実証を試みた。統合的動機に対応するものとして教養的目的を、道具的動機に対応するものとして実目的をそれぞれ設定することにより、2つのタイプの動機変数を測定する為の操作化を行ない調査を実施している。3校の国立大学と4校の私立大学を含む合計7校の大学生1457 (男子796, 女子661) 名を対象に調査を行なった結果、成績上位群においても、下位群においても実目的を持つ学生の割合が多く、この仮説は支持されなかった。

仮説が支持されなかった理由として、動機変数の操作化段階で、教養的目的と実目的を単純に当てはめたことに無理があったのかもしれない。あるいは日本という状況においては、この仮説は当てはまらないのかもしれない。Oller (1979, pp.138-40) は、ある言語を第2言語として学ぶ場合と外国語として学ぶ場合とでは状況が異なるため、外国語としてある言語を学習する場合の、外国語能力と動機の関係は、第2言語として学ぶ場合と比較すると弱くなる事を報告している。この様に、英語を第2言語としてではなく、外国語として学習しているという日本独特の状況がこの結果をもたらしたのかもしれない。後に吉田 (1977, p.111) は、カナダでは統合的動機が、インドでは道具的動機が英語学力と関係していることを示す研究を引用しながら、どちらの動機が関係しているかは学習者の置かれている社会的、経済的環境

や年齢などに関係することを指摘している。

この見解を参考にすれば、日本における英語学習においてどちらの動機が関係しているかは、日本という独自の諸条件によるということになる。では一体日本においてはどちらの動機が外国語学習と関係しているのかという疑問が残る。この問題は、本稿の目的ではないので、この議論については別の機会にゆずることにするが、一般的には、日本の大学の場合、多かれ少なかれ道具的動機が強いようである。日本のような、第2言語としてではなく、外国語として英語を学習する状況においては、学習者がより具体的な（つまり道具的な）目的を持つということは当然かもしれない。一方教員側は、長年の経験から、英語学習においては道具的目的と同時に統合的（あるいは教養的）目的も必要である事を学んでいるが、これを学生に理解させる事は容易ではないと考えられる。

本校と同様、外国語教育に力を入れている上智大学で、新入生へのオリエンテーションを意識したシンポジウム「教養主義と実用主義」が行なわれ、その記録が1985年の『ソフィア』133号に記されているのでここでの参考にしたい。この「教養主義」と「実用主義」は日本の英語教育についての伝統的な問題である。これについてシンポジウムの中で、両者は外国語教育の違う側面を分けて言っているので、「教養主義」と「実用主義」を分けること自体がおかしいのだという意見が出されている。つまり、例えば話す力（実用英語）も必要だが、自分の考えを構成する段階では例えば読む力（教養英語）も必要になってくるというのである。従ってどちらに偏っても良くないことを、「国際会議などでは立派にできて、その後のパーティでのフリートークで黙り込んでしまうという現実もある (p.33)」という例で示している。また、「実用主義」にも、1) 企業、社会一般に役立つ英語と、2) 専門分野に役立つ英語に分けられるのではないか (p.24) という意見が出されており興味深い。

安藤 (1977) も、教養のための英語と実用のための英語というような部分的なとらえ方をやめ、「世界的な日本人の育成 (p.10)」という視点から、英語学習を総合的にとらえるべきであることを主張している。

以上の様に、英語を学習するにあたっては、総合的な視点に立つべきなのであるが、このことはある程度長期間英語に関わった者にしか理解できないことなのかもしれない。従って、総合的に英語を学ぶ必要性については、大学4年間を通じ、長期的な視野に立って学生に教えていくべきものであり、数日間のオリエンテーションで伝えられるものではないと考えた方がよさそうである。

ところで、過去において特に統合的な動機と外国語学習との関係が強調され、多くの研究が行なわれてきたが、このことは、道具的動機が重要でないということを示すものではない。Gardnerら(1991)は、この点を明らかにするため、92名の心理学の学生を被験者として実験を行なっている。その結果は、統合的動機と同様に、道具的動機も外国語学習を促すというものであった。

また、統合的動機と道具的動機という区別も曖昧な点があり、事実 Gardnerら(1991, p.58)は両者に正の相関関係があることを述べている。この点について Clémentら(1983)は因子分析の手法を用いてより客観的な動機の類型を行なっている。その研究結果によると動機は、道具的(instrumental)なもの、友好的(friendship)なもの、旅行(travel)に関するもの、そして知識(knowledge)に関するものの4つに類型化される。これらはまさに現代の学生のニーズに対応している。例えば、就職に役立つ英語などは道具的動機、外国人の友達が欲しいことなどは友好的動機、海外旅行をしたいことは勿論旅行に関わる動機、そしていろいろなことを知りたいという欲求は知識に関わる動機にそれぞれ対応している。ここでの4類型のうち、後者の3類型は従来の統合的動機を細分化したものと解釈できる。

いずれにせよ、これらの動機が外国語学習能力と関わっているのであれば、積極的に英語教育の場で利用すべきであろう。例えば神山(1982)の研究は、学習者の外国語学習能力は情意的要因の働きかけによってある程度向上する事を示している。

ではどのように、これらの動機変数をオリエンテーション・キャンプに位置づけていくべきなのだろうか。動機は目標志向的な側面を持っており、明確な目標なくして動機はないと考えられる。例えば、Gardner(1985, p.11)は、目標達成欲求と目標に対する好ましい(favourable)態度が努力と結びついた場合初めて動機があると言える」と述べている。そこで、英語学習における動機づけの方向を示すために、英語学習の目標を明確化し、伝えることが有効であると考えられる。例えば吉田(1969)は、「英語を何のために学習するのか。その目的を明らかにすることは行動の構えを促し、用意を整えさせるうえで必要である。英語学習の目標が明らかになれば、学習結果について自己評価が可能となり、学習を一層増進させることになることを大学の英語教師は知るべきであろう(p.188)」と述べ、目的との関連で動機について配慮することの必要性を述べている。

では具体的にどのような目標設定をすればよいのであろうか。これまでの動機づけについての検討から、英語学習の目標については、道具的目的と統

合的目的（または友好・旅行・知識目的）とに大きく分けられるといえよう。そして、本学英语学科のカリキュラムを眺めてみると、これらの目的と関連する科目が整理されて4つの部門（英語、英語学、英米文学、英米文化）に分類されていることがわかる。つまり、英語部門は話したり書いたりする英語を学ぶという、実用的な目的を持ち、英語学、英文学、および英米文化部門は、その国民の使用している言語を知り、文学や文化を知ることにより、広い意味での国民の文化背景を知るといふ、統合的な目的を持っているのである。もちろんこれらを、専門家になるために研究する場合は、道具的目的となり得るので、2分割的にとらえられるものではないが、これらの目的と、各部門との関係の理解を促すことにより、新入生の英語学習における方向づけを行なう事ができ、さらに動機づけのきっかけとすることも可能であろう。

これを行なう上での注意点は、先ず新入生にもわかりやすい例をまじえながらオリエンテーションを行なうことである。そこで、教員や上級生が、「何故英語を学ぶか」について具体的に語り、英語学習の目的について多くの選択肢を示すことによって、新入生に刺激を与え、何故英語を学ぶかについて考えさせることができるのではないだろうか。選択肢については、今まで検討してきた動機の種類に対応させて考えると、次の5つがあげられる。先ず、道具的目的は、先にも示されていたように、企業に入ってから役立つという目的と、専門分野に進んだ時に役立つという目的の2つに分けられる。そして、統合的目的は、先に引用した Clément らの類型を参考にすれば、英語の文化背景を持つ人々を知りたいという友好的な目的、海外旅行のような旅行目的、そしてその文化についていろいろ知りたいという教養的な目的の3つに分けられる。

次に注意しなければならないことは、内発的動機は自己達成感と大きく関わっているので、これら5つの目標を説明する際、教示的にならないことであろう。碓井（1992）は、自己決定感のある状況においては、正のフィードバックを受けて自己有能感が高まると、内発的動機づけも高くなる研究結果を示している。このことから、キャンプでは選択肢を提示し、それに対応して4年間のカリキュラムが組まれていることを紹介し、どれに力点を置くかの最終決定は新入生に任せることが必要であろう。道具的目的でも、統合的目的でも、とにかくいくつかの目標があることを認知させ、その方向へとりあえず進ませることができれば、フレッシュマン・キャンプの目的は果たせたといえる。

4. アンケート調査結果について

ここでは、フレッシュマン・キャンプ後に実施されたアンケートの結果を報告し、フレッシュマン・キャンプの今後の参考としたい。

調査は2日目のクラスミーティングが終了した後に、その会場で行なわれたので、回収率は100%であった。なお、キャンプに参加した1年生は469名（男158, 女311）であった。アンケートは主にキャンプの運営に関する項目と活動内容に関する項目とで構成されているが、ここでは内容面について報告する。キャンプでの主な活動は、1日目のホテル到着後に後なわれたパネル・ディスカッション形式の全体ミーティングと、その夜に行なわれた15人程度の小グループ・ミーティング、そして2日目の午前に行なわれたクラス別ミーティングである。

まず、全体集会の内容は役に立ったかという質問に対しては以下の結果が得られ、役に立ったという答が全体の52.78%をしめている。

1. 全体集会の内容について
 - a. 役に立った……………247 (52.78)
 - b. 役に立たなかった…… 57 (12.18)
 - c. どちらともいえない…164 (35.04)
 - 計 468 (100.00)

(欠損1)

次に、全体集会の討議内容の1つである、「高校と大学の違い」に関する質問については以下の結果が得られた。「よくわかった」が66.88%で比較的高い数値を示している。

2. 高校と大学の違いについて
 - a. よくわかった……………313 (66.88)
 - b. わかりにくかった…… 35 (7.48)
 - c. どちらともいえない…120 (25.64)
 - 計 468 (100.00)

(欠損1)

さて、「高校と大学の英語教育の相違」という、英語に関連した質問につい

ては、以下に示すように、6割弱がよくわかったと答えている。高校と大学の英語教育の相違を理解させることは、全体集会の主な目的の1つなので、さらに多くの学生の理解を促す工夫が必要と考えられる。

3. 高校と大学の英語教育の相違について
- | | |
|-------------------|--------------|
| a. よくわかった…………… | 274 (58.55) |
| b. わかりにくかった…………… | 51 (10.90) |
| c. どちらともいえない…………… | 143 (30.55) |
| 計 | 468 (100.00) |
- (欠損1)

本学にも留学のプログラムが用意されているが、これに関する理解度は29.7%で低いと言える。これについては、留学についての説明がパネル・ディスカッションではそれほど中心的なテーマではなく、従って十分な時間を取って詳しい説明が行なわれなかったことが主な理由として考えられる。また、入学したばかりの新入生は、留学を身近な問題として捉えていないことも考えられる。

4. 留学等のプログラムについて
- | | |
|-------------------|--------------|
| a. よくわかった…………… | 139 (29.70) |
| b. わかりにくかった…………… | 138 (29.49) |
| c. どちらともいえない…………… | 191 (40.81) |
| 計 | 468 (100.00) |
- (欠損1)

さらに高次元のテーマである、「いかに専門分野を見つけていくか」については34.26%で、理解度が低いと言える。しかし、これは継続的な指導が必要な領域ともいえるので、キャンプ中に高い成果を上げることは難しいと考えられる。このように考えてみると、この種のテーマは短期間のキャンプのテーマとしてでなく、専門課程に入るまでの長期的なテーマとして扱った方がよいのかもしれない。

5. いかに専門分野を見つけるかについて
- | | |
|------------------|--------------|
| a. よくわかった…………… | 160 (34.26) |
| b. わかりにくかった…………… | 98 (20.99) |

英語学科フレッシュマン・キャンプにおける英語学習の指導

- c. どちらともいえない…209 (44.75)
 計 467 (100.00)
 (欠損2)

さて、多少リラックスした、夜の小グループでのミーティングにおいては、新入生はどの様な話に関心を示したのであるだろうか。以下の結果から、これから受ける授業のことが気になるようである (24.62%)。ほぼ同じ割合で、クラブ活動にも興味を示している (23.11%)。つまり、新入生は当面の問題に興味を示すことを、これらのデータは示していると言えよう。

6. コミュニケーション・タイムのテーマで最も関心を持ったのは
- | | |
|----------------|--------------|
| a. 勉強方法…………… | 65 (14.04) |
| b. クラブ・サークル活動… | 107 (23.11) |
| c. 授 業…………… | 114 (24.62) |
| d. 単位・留年…………… | 60 (12.96) |
| e. 留 学…………… | 53 (11.45) |
| f. 学校行事…………… | 1 (0.21) |
| g. その他…………… | 63 (13.61) |
| 計 | 463 (100.00) |
- (欠損6)

最後に、「来年も新入生にキャンプを行なった方がよいか」という質問に対しては、87.91%の学生が肯定的な答えを示している。

7. 来年の新入生にもフレッシュマンキャンプがあった方が良いか
- | | |
|-----------------|--------------|
| a. あった方が良い…………… | 407 (87.91) |
| b. ない方が良い…………… | 17 (3.67) |
| c. どちらともいえない… | 39 (8.42) |
| 計 | 463 (100.00) |
- (欠損6)

この項目はキャンプに対する満足度も示していると考えられるが、87.91%という数値は満足できるものと言える。この結果から、キャンプ全体としては成功の度合いが高いと言える。しかし、調査結果から、「大学の英語教育」や「いかに専門を見つけていくか」についての理解度は、高度なテーマであ

ることも手伝って、それほど高くないことも明らかになった。今後、これらの面での改善が必要であるが、同時に、これらのテーマについては、キャンプ後の継続的な指導が重要であることも明らかにされたと言える。

5. おわりに

本稿は、英語学科が行なっている新入生オリエンテーションのためのキャンプにおいて、特に英語学習面においてどのような指導が可能であるかを検討することを目的とした。このために、先ずオリエンテーションの本来の意味を探り、且つ他大学やアメリカの大学のオリエンテーションに関する資料を参考にした。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 一般に日本の大学でのオリエンテーションは学生部主導型が多いため、アカデミック面での指導が十分行き届かない。
- 2) アカデミック面でのオリエンテーションについては、教員の協力・参加が不可欠である。
- 3) アメリカの大学では長期的な視野に立ってオリエンテーションを行ない効果をあげている。

これらのことから、オリエンテーションにおいてはアカデミック面も強調すべきことがわかった。そして、英語学科のオリエンテーション・キャンプは教員主導型であることから、アカデミック面（英語学習）における指導を行なうことが十分可能であることを指摘した。

次に、学習における3つの主要変数について述べ、特に情意に関わる変数が学生を方向づけるという点で重要であることを示した。さらに、英語学習における道具的動機と統合的動機について述べ、これらの要因が英語学習能力と深く関わっていることを述べた。これらの要因は、英語学習における目的という問題に関連しており、明確な目標を設定することにより、学生を方向づけることができると考えられる。そこでキャンプにおいては、道具的目標と統合的目標があることを学生に具体的に示し、且つこれらの目標が英語学科のカリキュラムに対応していることを示すことによって、学生の4年生の方向づけを行なうことが可能であることを述べた。

また、キャンプに関するアンケート調査結果から、特にアカデミック面については、長期的な視野を持った指導の必要性が明らかになった。浅尾(1990)の言葉を借りれば、「オリエンテーションは新入時におけるもの、という考えを捨てて、その後の日常的な、またはカリキュラムをも巻き込んだものでなければならない (p.34)」のである。このように考えると、本文中に述べた、

アメリカで実施されている単位化された「1年生教育 (freshman education)」の1学期間コースは魅力的な響きを持っている。

文 献

- 浅尾豊信 1985 新入生オリエンテーションの在り方 大学と学生, No.227 文部省 7-12.
- 浅尾豊信 1990 新入生オリエンテーションの現状とそのあり方 現代の高等教育 民主教育協会 4月号 33-36.
- 安藤昭一 1977 目的論のいろいろ 英語教育一創刊25周年記念増刊号一 大修館書店 8-10.
- Bloom, Benjamin S. 1976 *Human Characteristics and School Learning*. McGraw-Hill. 梶田叡一・松田彌生(訳) 個人特性と学校学習 第一法規
- Clément, R and Kruidenier, B.G. 1983 Orientations in second language acquisition : I. The effects of ethnicity, milieu and target language on their emergence. *Language Learning*, 33, 372-91.
- Cutrona, C.E. 1982 Transition to college : Loneliness and the process of social adjustment. In Peplau, L.A. and Perlman, D. (Eds.) *Loneliness : A sourcebook of current theory, research, and therapy*. John, Wiley & Sons.
- 越前喜八 1990 新入生と大学教育—オリエンテーションをめぐる— 現代の高等教育, 4月号 民主教育協会 5-10.
- 遠藤郁夫 1987 修学指導の現状と課題 大学と学生, No.256 文部省 7-12.
- Gardner, R.C. and W.E. Lambert. 1972 *Attitude and Motivation in Second-Language Learning*. Newbury House Publishers.
- Gardner, R.C. 1985 *Social Psychology and Second Language Learning*. Edward Arnold.
- Gardner, R.C. and MacIntyre P.D. 1991 An Instrumental Motivation in Language Study : Who Says It Isn't Effective? *Studies in Second Language Acquisition*, Vol. 13, No. 1 57-72.
- Gardner, R.C., Day, J.B., and MacIntyre P.D. 1992 Integrative Motivation, Induced Anxiety, and Language Learning in a Controlled Environment. *Studies in Second Language Acquisition*, Vol. 14, No.2 197-214.

獨協大学英語研究

- 稲越孝雄 1990 新入生とオリエンテーション 現代の高等教育, 4月号
民主教育協会 25-29.
- 神山正人 1982 外国語学習における態度・動機の役割に関する実証的研究
国際基督教大学大学院教育学修士論文
- 河合隼雄 1982 大規模大学のオリエンテーションの在り方 大学と学生,
No.190 文部省 11-14.
- 三浦昌夫 1977 最近のアメリカ大学におけるオリエンテーションについて
厚生補導, No.129 文部省 21-26.
- 諸井克英 1986 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会学研究,
第25巻第2号 115-125.
- 中村弘道 1982 新入学生に対するオリエンテーション 大学と学生, No.
190 文部省 5-10.
- 中村弘道 1985 新入学生に対するオリエンテーションについて 大学と学
生, No.227 文部省 4-6.
- Oller, J.W.Jr. 1979 *Language Tests at School*. Longman.
- Schumann, J.H. 1975 Affective Factors and the Problem of Age in Second
Language Acquisition. *Language Learning*, 25, No. 2 209-235.
- 高橋靖直 1990 アメリカの大学のオリエンテーション 現代の高等教育,
4月号 民主教育協会 44-50.
- 碓井真史 1992 内発的動機づけに及ぼす自己有能感と自己決定感の効果
社会心理学研究, 第7巻第2号 85-91.
- Weiner, Bernard 1980. *Human Motivation*. Holt, Rinehart and Winston. 林
保・宮本美沙子(訳) ヒューマン・モチベーション 金子書房
- 吉田一衛 1969 大学英語教育におけるモチベーションの分析的考察
福岡教育大学紀要, 第19号第4分冊(教職科編) 175-189.
- 吉田一衛 1977 学習意欲 英語教育一創刊25周年記念増刊号一大修館書店
110-112.
- 油納芳生 1990 新入生とオリエンテーション 現代の高等教育, 4月号
民主教育協会 29-32.

English Education and the Freshman Orientation Camp : A Focus on the Affective Domain

Teruyoshi Sasaki

On April 7 and 8, 1992, the second freshman orientation camp of the English department was held. A survey result indicated that about 87% of the students were satisfied with the camp, however, there could be room for improvement. The purpose of this article is to provide an effective program for the camp that will motivate freshmen to learn English. For this purpose, the author referred mainly to studies in the affective domain in foreign language learning.

First, studies in the freshmen orientation program were reviewed. Through this, most orientation programs of the Japanese universities were discovered to be focusing not on academic study but on the registration or campus life. Consequently, the program may help students adjust to their lives on campus, however not to the academic circumstances, which, in turn, may cause loss of interest in the study of their major, English. Therefore, the emphasis should be focused on the field of academics.

Second, the author reviewed the studies in the affective domain in foreign language learning to show that integrative motivation plays an important role as well as instrumental motivation. Of these two types of motivation, some studies have indicated that integrative motivation correlated higher with English proficiency. Furthermore, Clément (1983), utilizing factor analysis, proposed four types of motivation ; instrumental, friendship, travel and knowledge. Basically these types of motivation are related with goals in foreign language learning. Without goals, students would make no effort and have no desire. In this sense, the clarification of the goal is significant in motivating students.

In conclusion, from the viewpoint of academic orientation, the introduction of these goals during the camp would be helpful for freshmen to re-consider their own goals to learn English, which, in turn, would motivate them to learn English.